

## 山がある風景

2022. 11. 14

あなたは、山の民か海の民かと聞かれれば、迷いなく山の民と答える。かろうじて盆地の平地面に生まれ育ったが、山が近い。盆地に暮らしていると、四方を山に囲まれているのが当たり前である。何だか山々に守られているようで安心できるが、山が迫ってくるようで窮屈にも感じる。「ここを出たい」という感情が湧いてくる。

車や新幹線で東京方面に向かうと、いつの間にか山がなくなる。毎回、その光景に多少驚く自分がいる。関東平野である。盆地とは違う。地形は、人の成長にも影響を及ぼすのではないかと思えてくる。山を見て育った人と海を見て育った人、平野で育った人、それぞれの気質などに与えるものがあるのではなからうか。

平野があるとは言っても、日本は山国である。地図や地形図を見れば分かるが、山だらけである。わずかな緑の部分を中心に、人がひしめき合って暮らしている。

以前、モンゴルに行ったことがある。首都のウランバートルには、近代的なビルが立ち並ぶが、少し車を走らせれば、イメージ通りの大草原である。遙か彼方まで平地である。開放感いっぱいである。その一方、何の目印もないような所で、どうやって目的地にたどり着くのだろうと不安になってくる。だが、我々を乗せたバスは、迷わず目指すところにたどり着いた。

毎朝、学校の入り口に立っては吾妻山を眺め、校長室からは安達太良山を見ている。昨年と今年の違いはというと、山の色である。山は青く見えることが多いと思っていた。ところが、今年は緑が映える日が多かったように思う。今までは何となくしか見ていなかったせいなのかもしれない。

実家に行くと、山はさらに近づく。この山々を見て育ったのだとしばし感慨に浸ることがある。自分を育ててくれた故郷の山々である。小学校も中学校も山に向かって歩いていた。高校生になって、ようやく山から解放された。

それ以来、山を見なくなっていた。40年以上が経過して、再び山を見るようになった。山は変わってはいないのだが、変わったように感じる。それは見るほうの自分が変わったためなのだろう。同じ景色でも気持ちのありようで違って見える。

昔は、山が嫌だった。早く盆地の外に出たいと思っていた。だが、結局、山々に囲まれて生きている。二度の単身赴任では、山は近いのではなく、山々に囲まれて生活していた。山とともに生きることを短期間ながら経験した。

福島盆地の山々に囲まれていると、周期的に外に出たくなる。それは今でも変わらない。だからといって、完全にこの地を離れるのかというと、そこまではしない。それが山の民である。快晴の日は、吾妻山も安達太良山も張り合うように、その存在を示してくれる。威容を誇るが如くだが、優しさも感じさせてくれる。結局、山がある風景からは離れることができない。